



## 井伊家に伝来した彦根彫の鐺

鐺とは、刀剣の柄と刃の間に装着される刀装具で、刀を持つ手を保護する、あるいはバランスを整えるという重要な役割を果たすものです。

鐺は古来より様々な装飾が施され、賞翫されました。江戸時代になると、鐺を鑑賞し、珍重する傾向はより強くなりました。

鐺などの刀装具を作成する金工師は、大名たちの保護を受け、室町時代末以降全国各地に現れ、彦根でも活動する者がいたことがわかっています。その中でもとりわけ有名なのが、喜多河宗典です。

喜多河宗典は、江戸時代中後期に彦根の中数に住んだとされる人物で、「藻柄子」という号を用い、門派を形成しました。彼の作品は畿内、江戸を中心に全国的に人気を博し、天明元年（一七八一）に出版された『装剣奇賞』などの金工師を特集した書物にもその名前が記載され、その流行ぶりが窺えます。

写真は、井伊家に伝来した、「武者合戦図大小鐺」一組です。

右の大的鐺には、表に「藻柄子喜多河入道宗典製（花押）」、裏に「江州彦根住」の銘、左の小的鐺には、表に「藻柄子入道宗典行年七十三歳製」、裏に「江州彦根住喜多川」の銘が切られています。地金は、大小どちらも銅に少量の



写真① 武者合戦図大小鐺（当館蔵）

金を混ぜた赤銅で、彫のない部分には、表面に粒のような模様を浮き出させる魚子地の技法を用いています。

図様は、大小ともに、右上に騎馬武者、右下に進軍する歩兵を表し、左には海上戦が激しく行われる様子が描かれています。また、裏には神社と大勢の武者たちが表されています。人物は一人一人表情が細かく彫られ、武士たちが持つ弓や軍配などの武器・武具の表現も正確で、金象嵌と色絵、彫の深さの使い分けに



写真②（大的鐺拡大）

よってそれぞれの絵の輪郭がはっきりと表現されており、戦いの臨場感がよく伝わってきます。

本作は宗典とその門派の特色がよく表れています。中央の地金を厚くし、彫を深くする高彫と金を細かに埋め込む金象嵌の技法によって、図像を華々しく強調する彼らの作は、彦根彫とも称されています。

しかしながら、彦根彫については、十分な研究がなされておらず、宗典とその門派たちについても詳細などは不明瞭です。また、宗典銘をもつ作品は各所に残っていますが、贋作も多く、その真贋を正確に判別するのは、困難を極めます。

宗典を含め、その門派の作品、史料を今後も注視し、実態を把握していく必要があります。

【彦根城博物館学芸員 今中啓太】

写真の作品は、テーマ展「金のきらめき―輝きの日本美術―」で11月4日（月）休まで展示します（期間中無休）。